大宮まちまち新聞

Vol.019
2024年6月1日発行
OMIYA LIBRARY

図書館のご近所さん　HUMANITIES CAFE fudoki

店主の吉原さん

大宮駅東口を出て中山道に面した細い路地を進んでいくと、大きな出窓から真っ白な店内が視界に飛び込んでくる「HUMANITIES CAFE fudoki」（ヒューマニティーズカフェ・フドキ）。2023年7月にオープンしたお店を訪ね、オーナーの吉原啓（よしはらけい）さんにお話を伺いました。

―お店をオープンされるまでの経緯は？

子どもの頃は料理人になりたいと思っていました。その後歴史に興味を持ち、古代史を研究する道へ。栃木県大田原市で学芸員を5年、奈良県の万葉文化館で3年間研究員をしましたが、その頃から研究の成果を社会に還元する場は、博物館・美術館や大学でなくてもいいのではと考えるようになりました。30代後半になったところで料理店に就職し、飲食の基礎や経営を学びました。

大宮を選んだのは、交通の利と、にぎやかな商業地だったからです。また、大宮の歴史にも興味があって。

―お店のコンセプトはやはり「歴史」ですか？

歴史好きな人が来て下さるのはもちろん嬉しいのですが、〝飲食を目的に来店したお客様の視界の端に歴史の情報が入って、そこから興味を持ってもらう〟のが一番の狙いです。実際、「お店のSNSが可愛かった」などがきっかけで来てくださる方が多いです。たまに近隣の歴史好きな方が来て、いっしょに歴史談義をすることもありますよ。

埼玉考古クッキー

―研究の成果を還元する、とは具体的にどのように？

メニューに取り入れています。

「埼玉考古クッキー」は、行田の古墳から出土した水鳥形埴輪、埼玉で一番大きい前方後円墳である二子山古墳、東日本で一番古い仏教寺院の瓦のかけら、江戸時代の土人形など、古代に限らずいろんな時代のものを選んで型を起こしています。実際の水鳥形埴輪は白く塗られている部分があって、白鳥を表現したものではないかと言われています。鳥は古代から魂を運ぶ存在とされ、非常に重要視されていました。クッキーの材料に使用している菱（ひし）は吉野ヶ里遺跡のある神埼（かんざき）産で、皮を除いて実だけを粉にしたもので食され、都の貴族にも献上されていたことが判っています。

また万葉文化館での研究を活かして、「万葉の歌クリームソーダ」を提供しています。毎月テーマになる歌のイメージに合わせてスタッフがクリームソーダを創作しています。私は国立国会図書館で研究書や論文を読んだり、資料調査をしたりして半月程かけてクリームソーダに解説をつけています。

変わったところでは、なまずを使った料理もあります。近世に関西から関東に伝わったようで、海のない埼玉ではよく食べられていました。白身魚のような淡白な味わいです。初めて食べるお客様は最初の一口を恐る恐る召し上がっていますね。

―展示もあるとか。

店舗の外壁に地域の歴史や文化に関わるようなパネル展示をしています。現在は、古代の食文化全般や武蔵国の古代食文化についての展示を出しています（取材時）。今後はなまずに関するものや氷川神社東遺跡などを取り上げるのも面白いかと思っています。

パネル展示（取材時4月）

―お店でやってみたいイベントなどありますか？

以前、奈良でおこなったイベントで、古代食の講義と復元ランチを食べて古代食に関連する遺跡などを辿る企画を行ったことがあったので、この店でも料理と共に味わう講座など、いろいろ企画したいですね。

数々の講演会をなさっているからか、吉原さんのお話はとても面白くて、取材を忘れてついつい引き込まれてしまいました。「万葉の歌クリームソーダ」の興味深い解説もたくさん伺ったのに掲載しきれないのが残念ですが、気になる方はお店へどうぞ。

視界の先にちらっと入った歴史の話に心惹かれるものがあったら、ぜひ大宮図書館で本を探してみてください。「fudoki」が蒔いた知識の種が花開くことになるかもしれません。

エッグベネディクトもおいしい

万葉の歌クリームソーダ（取材時4月）

【住　所】HUMANITIES CAFE fudoki
さいたま市大宮区大門町1－63
栗橋ビル1F－b号
【電　話】048－729－6088
【営業時間】11時30分～21時
【定 休 日】水・木曜日

ゆかりの文学コーナー　『榊　邦彦』

今回紹介する榊邦彦（さかきくにひこ）氏は、旧大宮市出身の作家で、著書『ミサキへ』（後に『100万分の1の恋人』に改題）において第二回新潮エンターテインメント新人賞を受賞した。

100万分の1の確率で罹る遺伝病の家族を持つ女性との恋愛を描いたこの作品は「戦後の医療小説30選」や「医療を読むと現代が見える…疾病別医療小説ガイド35選」等雑誌の特集にも選出されている。

著者は現在母校の開成中学・高等学校で教諭をしており、著者が行った国語の授業が宇多川はるか著『中学校の授業でネット中傷を考えた指先ひとつで加害者にならないために』において完全再現されている。この本は「インターネット・SNSの書きこみ・誹謗中傷の問題」をテーマにして、生徒たちが真剣に向き合った授業の様子が描かれた作品である。

作家や教師としてめざましい活躍をされている同氏のお母様は大宮出身の世界的な舞踊家アキコ・カンダ氏であり彼女もすばらしい文章を多く残している。

参考資料
『100万分の1の恋人』
榊邦彦／著　新潮社　2007年
『中学校の授業でネット中傷を考えた－指先ひとつで加害者にならないために－』
宇多川はるか／著　講談社　2023年
『おんなを踊る』
アキコ・カンダ／著　駸々堂出版社　1980年
『アコレおおみや　2012年10・11月号』
アコレおおみや編集室　2012年

吉原さんにオススメの本を伺いました！

『若い人に語る奈良時代の歴史』
寺崎保広／著　吉川弘文館　2013年
私の師匠の著書で、研究者ではない人にもわかりやすいように書かれています。

『万葉集』
中西進／著　講談社　1978年
万葉文化館の元館長の著書です。万葉集は、訳者によって解釈が変わるところも面白いんです。美しい表紙絵も魅力です。

『埼玉県の歴史』
田代脩ほか／著　山川出版社　1999年
今まさに私が埼玉県の歴史を勉強するために読んでいるものです。

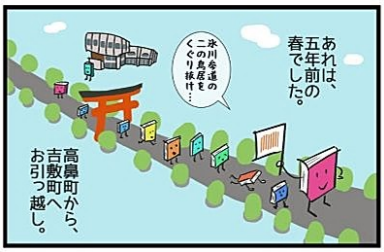
大西民子の一首

とどこほる雲のごときは差し措きて
力ある者走り続けよ

『光たばねて』より

この歌は、もともと雑誌「波濤（はとう）」創刊号のために詠んだ歌です。「波濤」創刊号で、民子は滞る雲とは自分自身のことに他ならないと書いています。力ある人々は私のことなど放って走り続けていってほしい、と励ましの気持ちを込めた一首です。

あれから五年これから五年



大宮図書館 ホームページ

大宮図書館 X(旧Twitter)

Xではイベントやスタディーコーナーの待ち人数など大宮図書館の情報を日々ポストしています。ぜひ、フォローしてみてくださいね！

この刊行物の書影画像はBOOKデータASPから引用しています。

大宮20景 謙信の伝説を伝える 景元寺

上杉謙信の家臣である長尾景元（ながおかげもと）の陣屋跡を寺にしたことから景元寺と名付けられたそう。謙信が雷雨をしのぐために、この大木の下で雨宿りをしたとも伝えられています。

境内に2本ある椎の木はどちらも樹齢が推定450年、高さ118mの大木で、さいたま市の天然記念物に指定されています。これからの時期は、夏の日差しをうけて木漏れ日がきらきらと輝くことでしょう。

参考文献
『大宮の文化財3』大宮市教育委員会／編・出版 1987年
『埼玉ふるさと散歩 大宮市』サンケイリビング／編 さきたま出版会 1980年

歴史部

「すべてのローマン体大文字の源」とされる記念碑が、現在でもローマに残されている。

今から2000年ほど前、古代ローマ帝国トラヤヌス帝がダキア（現在のルーマニア）戦争の勝利記念として建てた石碑で、大理石に文字が彫られており、平筆の下書きをもとにしているためやわらかな膨らみや豊かな抑揚を持つ。

ローマにはたくさんの碑文があるのに、なぜ「トラヤヌス帝の碑文」だけがすべてのローマン体大文字の源と言われるのか。その理由は文字の完成度の高さと、文字配置のバランスが抜きんでていること。さらに、当時存在した23文字のアルファベットのうち19文字が記されていることだ。ここまで破損せずに残っている碑文はほとんどなく、ルネサンス後期から現在に至るまで模倣と検証が繰り返されて2000年もの間、多くの活字書体の礎となってきたのだ。

16世紀の筆記官クレッシによる研究や、19世紀のエドワード・カティチによる拓本から全ての文字を検証し正確な線画で起こした調査などが、現在も使われるフォントの書体の誕生につながっている。

心奪われる欧文書体の印刷物に出会ったとき、かつては手で書かれ、石に刻まれ、金属に刻まれてきた文字の歴史に思いを馳せると、また感じる美しさが変わるかもしれない。

「ローマン体」という書体をご存じだろうか。アルファベットのタイポグラフィの先端に突起（セリフ）のついた普段よく目にする活字のことである。

街でみかけたローマン体

参考文献
『文字講座』浅葉克己ほか／著 文字講座編集委員会／編 誠文堂新光社 2009年
『欧文書体―その背景と使い方―（新デザインガイド）』小林章／著 美術出版社 2005年
『欧文書体百花事典』組版工学研究会／編 朗文堂 2003年

おなかへった

突然ですが、ご近所のお散歩や旅先で、素敵なお家に出会うことはありませんか？こんな庭先でお茶の時間が持てたらなんと癒されることだろう、と思う時があります。ところが最近では植物に占拠された空き家を目にすることが多くなり、かつてはここにもそんな時があったのかな、とせつない気持ちになることがあります。

そんな〝空き家問題〟を軸にストーリーが展開されるという触れ込みのこの本に興味津々で読み始めると、「マダムのお茶会？何?!空き家のお話じゃなかったのぉ？」と思いつつ、アフタヌーンティーという私には未知の世界（瞼を閉じて、三段重ねのティースタンドにカラフルに並ぶケーキやマカロンにサンドイッチ、そして琥珀色の紅茶を思い浮かべる。いずれ体験せねば。）に心惹かれた上思ったら、突然ちょっと怪しげな雰囲気に。並行するように空き家問題にもギョッ、どきっ、ゾワッ……。まんまと惹き込まれていきます。

かつて生活があり大事にされてきた家。その主を失った時に、残された人たちはどの様に対処していくのか。そんな中でも、推し活仲間と遊園地のフードコートでプチ宴会の様相……？70代になっても楽しそう♪

ストーリーも気になるが、次々に出てくる食事のシーン。コンビニのマリトッツォ（今は見かけることがなくなってしまって残念）やら息子の作る参鶏湯（さむげたん）風スープなどなど、ちょっと想像がつくだけに余計におなかが減ってしまいます。空き家問題と食事風景がどのように繋がるのか？

親しい人と一緒に食事の時間を持つということは楽しい、と思える一冊です。

紹介した本
『カモナマイハウス』
重松清／著 中央公論新社 2023年

わたしのすきなえほん

わたしは、絵よりもお話が好きな子どもでした。

絵本の時代を光の速さで通り抜け、松谷みよ子の『モモちゃん』シリーズなどにハマっていた園児のわたしは、字よりも絵の方が多い本などコドモが読むものだと思っていたのです。

二歳下の弟は、もちろん絵本が好きでした。『ひとまねこざる』に夢中です。当時の私はコドモだなあと思いながらも、試しに読んでみることにしました。

しりたがりやの、おさるの"じょーじ"。動物園のぞうさんの大きな耳の下で眠るちいさなじょーじが可愛くて、何度もながめました。この世にはお話以上に絵が楽しい本もあったのです！

別のページではなんと、じょーじが鍋いっぱいのスパゲッティを食べようとして、スパゲッティでぐるぐるまきに！

……しかし実をいうと、わたしが最初に読んだ絵本には「スパゲッティ」という文字がありませんでした。そこには「うどん」と書かれていたのです。昭和40年代、わたしたち子どもはスパゲッティが大好きでしたが、私の祖父より年上の翻訳者（光吉夏弥、明治37年生まれ）は"うどん"じゃないと子どもたちに通じないぞ！」と思ったのでしょう。

いま大宮図書館にある『ひとまねこざる』でじょーじが食べているのは"スパゲッティ"です。そんなことに気がついたのはもちろん、図書館で働き始めてからでした。

幼い日に読んだ絵本と大人になってから再び出会い、何かを発見する。これもまた、長い生命を持つ古典的名作の面白さ、かもしれません。

紹介した本
『ひとまねこざる』エッチ・エイ・レイ／文・絵 光吉夏弥／訳 岩波書店 1980年
『ひとまねこざる 改版』H.A.レイ／文・絵 光吉夏弥／訳 岩波書店 1998年

参考文献
『光吉夏弥 戦後絵本の源流』澤田精一／著 岩波書店 2021年

おおみや読書バトン

第14回 テーマ『愛情』

サリー・ルーニーの『カンバセーションズ・ウィズ・フレンズ』には多様な愛情が登場します。タイトルにあるように友人間の愛情であったり、同性同士の愛情であったり、親と子、家族間の愛情であったり…。物語の主軸となるのは、古典的な男と女の愛で、有り体に言えば不倫の物語です。若い女性が中年の既婚男性に惹かれていく、という。

このように紹介すると読者を限定してしまうような気がしてなりません。恋愛小説というと手を出さない方もいらっしゃることでしょう。私も、普段は惹かれるジャンルではないのですが、それでもこの作品に興味をもったのは理由があります。それは、著者ルーニーが現代を代表する新進気鋭の作家である、ということ。それだけの理由で手に取った訳なのですが、読み終えた後には、この作家の著書をもっと読んでみたいと思い、すぐさま同じく日本語に訳されている『ノーマル・ピープル』も読みました。

どちらの作品にも共通する魅力は、著者が描き出す世界の圧倒的なリアリティにあるように思います。

『カンバセーションズ・ウィズ・フレンズ』は、現代の理不尽で不平等な格差社会がありありと描き出され、その中で登場人物たちの関係性は物語が進むにつれ複雑化し、手に負えないものになっていきます。ラストは納得できるものではなく、読後にはため息が出てしまいました。が、この終わり方だからこそ現実感があり、不条理を生きていくしかない今が鮮やかに表現されています。格差社会が広がりゆく中、読んでみてよかったと思える作品なのでした。

ということで、次回のテーマは「格差」でお願いします。

紹介した本
『カンバセーションズ・ウィズ・フレンズ』サリー・ルーニー／著 山崎まどか／訳 早川書房 2021年
『ノーマル・ピープル』サリー・ルーニー／著 山崎まどか／訳 早川書房 2023年